

2022年 4月 3日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「見よ、この人だ」 ヨハネによる福音書 19章1-16節 高橋彰

19 1 そこで、ピラトはイエスを捕らえ、鞭で打たせた。2 兵士たちは茨で冠を編んでイエスの頭に載せ、紫の服をまといさせ、3 そばにやって来ては、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、平手で打った。4 ピラトはまた出て来て、言った。「見よ、あの男をあなたがたのところへ引き出そう。そうすれば、わたしが彼に何の罪も見いだせないわけが分かるだろう。」5 イエスは茨の冠をかぶり、紫の服を着けて出てこられた。ピラトは、「見よ、この男だ」と言った。6 祭司長たちや下役たちは、イエスを見ると、「十字架につけろ。十字架につけろ」と叫んだ。ピラトは言った。「あなたがたが引き取って、十字架につけるがよい。わたしはこの男に罪を見いだせない。」7 ユダヤ人たちは答えた。「わたしたちには律法があります。律法によれば、この男は死罪に当たります。神の子と自称したからです。」

8 ピラトは、この言葉を聞いてますます恐れ、9 再び総督官邸の中に入って、「お前はどこから来たのか」とイエスに言った。しかし、イエスは答えようとされなかった。10 そこで、ピラトは言った。「わたしに答えないのか。お前を釈放する権限も、十字架につける権限も、このわたしにあることを知らないのか。」11 イエスは答えられた。「神から与えられていなければ、わたしに対して何の権限もないはずだ。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪はもっと重い。」12 そこで、ピラトはイエスを釈放しようと努めた。しかし、ユダヤ人たちは叫んだ。「もし、この男を釈放するのなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する者は皆、皇帝に背いています。」

13 ピラトは、これらの言葉を聞くと、イエスを外に連れ出し、ヘブライ語でガバタ、すなわち「敷石」という場所で、裁判の席に着かせた。14 それは逾越祭の準備の日の、正午ごろであった。ピラトがユダヤ人たちに、「見よ、あなたたちの王だ」と言うと、15 彼らは叫んだ。「殺せ。殺せ。十字架につけろ。」ピラトが、「あなたたちの王をわたしが十字架につけるのか」と言うと、祭司長たちは、「わたしたちには、皇帝のほかに王はありません」と答えた。16 そこで、ピラトは、十字架につけるために、イエスを彼らに引き渡した。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

「見よ、この人だ」(19:5)とイエスを指し示して宣言する言葉をヨハネ福音書はローマ総督ピラトの発言として記します。そこに立たされていたイエスは茨の冠を載せられ、紫の服を身にまといさせられ、顔はローマの兵士たちから叩かれて腫れ、体も鞭打たれ傷だらけになった姿でした。「ユダヤ人の王」という称号も、そのような扮装をさせたのも、ピラトや兵士たちにとっては侮蔑の表現でした。そうして痛めつけ蔑んだイエスをユダヤ人たちに見せつけて、ユダヤ人たちをも蔑みながら、このような処遇でお前たちの訴えはもうよいだろうと、事を済ませようとしたのかもしれませんが。

ヨハネ福音書は、ピラトの「見よ、この人(男)だ」という言葉を二重の意味で記します。みすばらしい姿にされ、傷つき、無力で、蔑まれたこの方を、しっかりと見よと。それは、多くの人びとにとって衝撃であり続けていますし、簡単には受け止めがたく、恐れや痛みを覚えずにはいられないことです。しかしこの方を通してこそ、神はご自身を示されたのだと。ある注解では、旧約のゼカリヤ書6章10-16節の言葉を引いて説明しています。

「銀と金を受け取り、冠をつくり、それをヨツァダクの子、大祭司ヨシユアの頭に載せて、宣言しなさい。万軍の主はこう言われる。見よ、これが『若枝』という名の人である。その足もとから若枝が萌えいでる。彼は主の神殿を建て直す。彼こそ主の神殿を建て直し威光をまとい、王座に座して治める。その王座の傍らに祭司がいて平和の計画が二人の間に生ずる。」

みじめな姿の中に、神の真理を証している「若枝」イエスを見よ、神の預言はこの方によって成就した。ラテン語で「エッケ・ホモ」と訳されたこの言葉は、この場面の受難のイエス像を描いた絵の題となり、今日まで多く絵が描かれています。17世紀日本に伝わったキリスト教の迫害のための絵踏みのイエス像もこの場面を刻んだものが多く残されています。近代では、人間の苦しみの象徴としての描写、暴力や戦争による人間の退廃を描き込まれた作品もあります。

ピラトは官邸の外と中を何度も行き来しています。外には絶対に入り込まないという態度で自分たちの清さ義しさを貫こうとするユダヤ指導者たちがいます。中では傷つけられたイエスがおリピラトは尋問で、イエスに罪が見いだせないことを承知します。しかしその「真実」に従った裁きをピラトは実行できず、イエス一人を釈放できません。ユダヤ人たちの暴動を予想して手を焼き、「この男を釈放するのならあなたは皇帝の友ではない」などという言いがかりの訴えにおびえます。ピラトはイエスを十字架につけることを許可してしまいました。それは彼にとって、自分自身の真実さを裏切ることになったのです

そしてまた、訴えた祭司長たちも、イエスを十字架にかけるために必死で追い込む言葉の中で、「十字架につけろ」と叫んで十戒の「殺してはならない」を破り、「わたしたちは、皇帝のほかに王はありません」などと発言し、自分たちの信じる真実さを自ら言葉で裏切ることもあったと言えます。

このようにして、大勢でイエスを追いやり、貶め、傷つけ、裁いて殺してしまおうと力を振るうようでありながら、「敷石」と呼ばれた、イエスが目の前にいる場で、誰もが皆、自分たち自身が真理を曲げ、敵意や保身によって自らを欺き裏切る自己矛盾の姿が暴き出されているかのようです。



人びとの罪の姿がさらされる。暴力と苦しみを受けた傷があらわにされる。その苦しみの場にイエスは王として立っておられます。イエスはなぜ、この王なのか。罪人たちを招き、導き、代表されて、十字架につけられた王のみ国に、共にいる者とならせていただきたいと願います。

教会の約束

わたしたちは、神の恵みによってイエス・キリストは主であると信じ、告白してバプテスマを受け、この教会の一員に加えられましたので、聖霊の助けによってこの約束をいたします。

わたしたちは、この教会が人によってではなく神によってできたものと信じ、主の日の礼拝、教会の定めた集会に参加し、教会がきよくなるよう、一致するよう、栄えるように祈ります。またバプテスマと聖餐の二つの礼典、そして聖書の教えと教会の定めた秩序とを守ります。

わたしたちは、この教会を支え、また世界に福音を伝え、神のみ心が広く行われるために進んで必要なものをささげます。

わたしたちは、主にある兄弟姉妹として愛しあい、互いの喜びと悲しみを共にいたします。

わたしたちは、ひとりで祈ることや家族と共に祈る生活を大切にし、わたしたちが預かったこどもたちを神に喜ばれるものになるように教え育て、またまことの心と正しい行いとすべての人を愛することによって、人びとを救い主に導くよう心掛け、主と再び会う時まで、この約束を固く守ります。

わたしたちは、どこにあってもこの約束の精神と神の言葉の真理が実行される教会に加わることを約束いたします。

日本バプテスト同盟 関東学院教会

「教会の約束」について

「教会の約束」と言われるこの言葉は、Church Covenant と言い、本来は教会契約と訳されるべきものです。

バプテスト教会の一番の特徴はこの「契約」を結ぶということにあると言われます。17世紀にイギリスに発足した初期のバプテスト教会は、ただ信仰を告白しバプテスマを受けた信仰者の集まりとしてではなく、「契約共同体」として教会形成がなされました。

契約とは、第一に神と教会員の、第二に教会員相互に交わされる二重の構造を持ちます。教会の一員になるとは、神との、そして信徒相互の契約のパートナーになるのだという自覚と責任をもって集まっていたのでした。

一つの教会が各自で教会の契約を結ぶゆえに、各個教会が尊重されるのです。そういう意味で「教会の約束」はバプテスト教会の本質的で重要な意味を持っています。

本来ならば関東学院教会固有の「教会契約」があるのが望ましいですが、教会では、日本バプテスト同盟に連なる教会が多く採用してきた約束の言葉を採用してきていました。この「教会の約束」の本文は2009年改訂新版の日本バプテスト同盟「信徒の手引き」にある口語文の言葉です。かつて関東学院教会で唱えられていた文章は文語体でしたが、このたび聖餐式の中で唱和することを再開するにあたり、同内容の口語文を採用いたします。

聖書では、神はイスラエルと契約を結ばれた方であると証言しています。そしてイエスの十字架と復活は、神とわたしたちの新しい契約です。神は罪ある人を愛し、赦し、救い出して新たに生かしてくださるのです。

約束してくださる神に支えられ促されて、わたしたちも神と、そして人々と、愛と赦しの関係に生きるというこの教会の約束を心から唱和し、その道に歩みたいと心から願います。